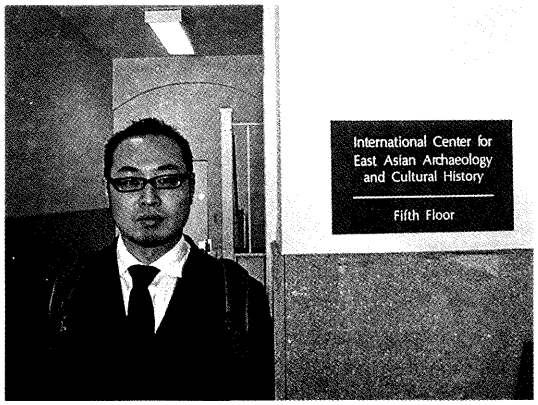
「平成26年度新呼び水プロジェクト・東アジアの近･現代史資料を所蔵する各国文書館の国際連携ネットワークの構築」携拡充活動報告書

山口大学経済学部経営学科　准教授　山　下　　訓
Satoshi　YAMASHITA

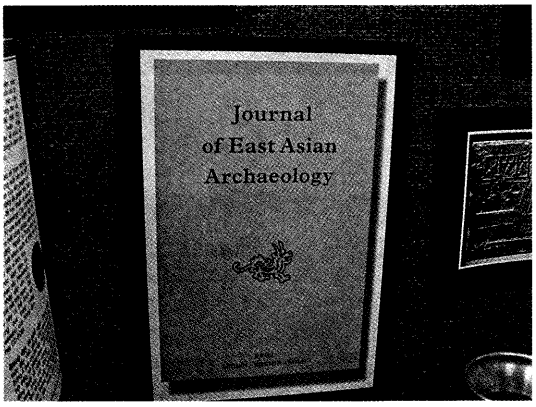
始めに、同行者である石川耕三准教授から詳細な報告書が提出されており，詳細は参照されたい。また，本報告は，了解を得て，その報告書に依拠している。

今回の訪問目的は，アメリカ合衆国においてアジア研究で頑張っている資料収集拠点を訪問し担当者とコネクションを築くことである。訪問先のコレクションの特徴および現状を把握したうえで，山口大学東亜経済研究所コレクションの独自性をアピールし，将来的な国際的連携可能性を探ることである。



1階入り口

4階，入口のボード。



（1）ボストン大学東アジア考古学・文化史国際センター（International Center for East Asian Archaeology & Cultural History（ICEAACH））は，ボストン市内西側にあるボストン大学の東端に位置している。大都会のキャンパスらしくバーンズ＆ノーブル書店の隣の建物の4階にある。普通のオフィスビルの入口を入り，エレベーターで４階に上がる。４階のフロアーほぼ全てが「東亜

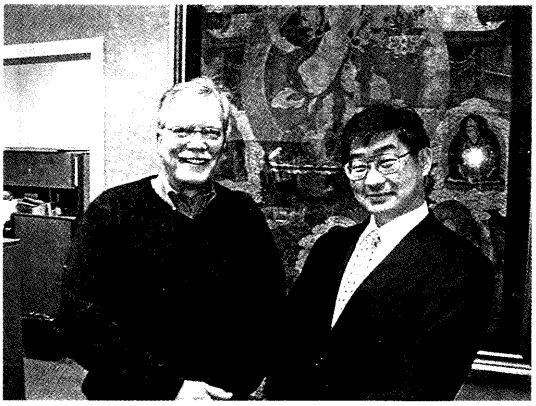
考古學文化史國際研究中心」である。

このセンターは1999年にHenry Luce財団の助成で設置され，東アジアの考古学および文化遺産に関する国際的なセンターとなっている。ボストン大学考古学学部の一部もなしている。上掲写真にあるように，この図書室には，考古学に関する東アジアの現地語資料，当該分野の現地語刊行研究雑誌を広範に収集している。

下記は日本語の文献であり，各県別に資料がある。

下記は，日本語資料の前で，Murowchick氏と石川准教授。

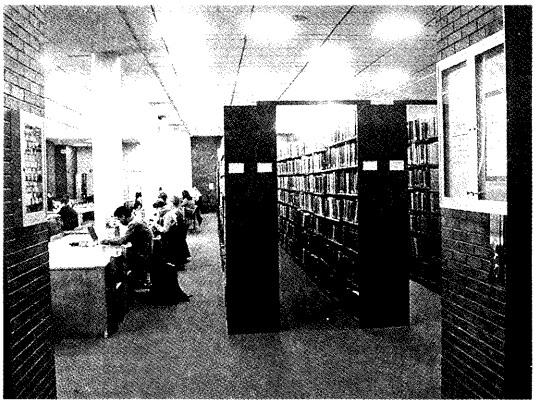
下記は，筆者と入口の前で。



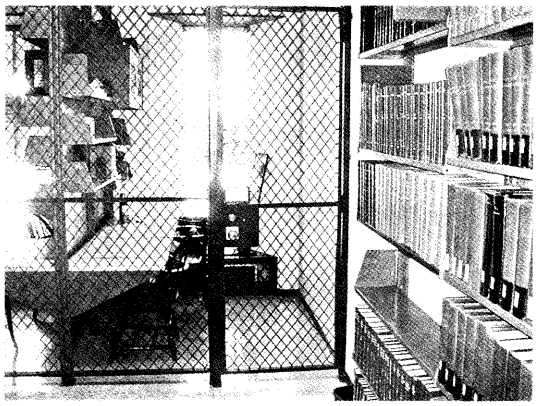
上掲写真のRobert E. Murowchick氏（当センターDirectorおよび考古学・文化人類学Assistant Professor）にお会いし，資料終章の方針及び状況について説明を受けた。

当センターは，東アジア研究に関する米国における拠点の一つであり，日本語のみならず，戦前に関しては中国語・韓国語の資料に関するノウハウを持つ東亜経済研究所は，ボストン大学が目指している英文目録化プロジェクトに対して大いに協力できると思われた。

（2）Murowchick氏と話して，東アジア資料をボストン大学全体で所蔵しているかを確認するために，総合図書館であるMurgar記念図書館を見学した。



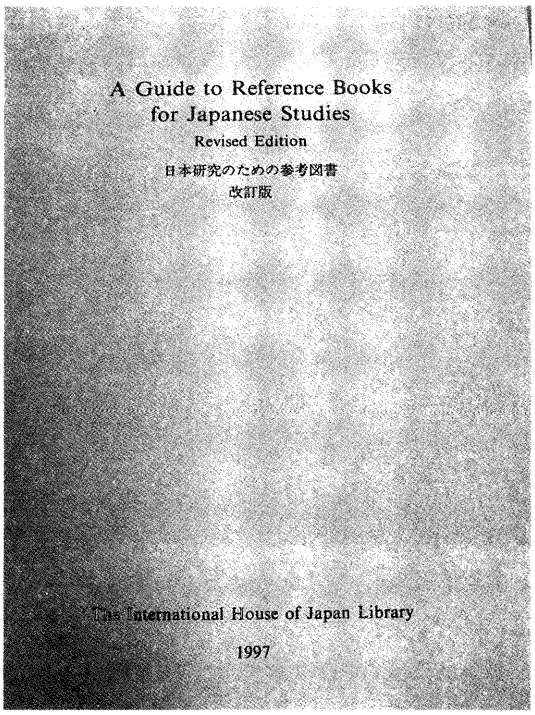
ここは，出入りが自由で驚いた。また，学生向けの個人机は壁際に配置されており，金網フェンスの部屋が続いている。入口は施錠でき，一つの机に二人が学習するようになっている。

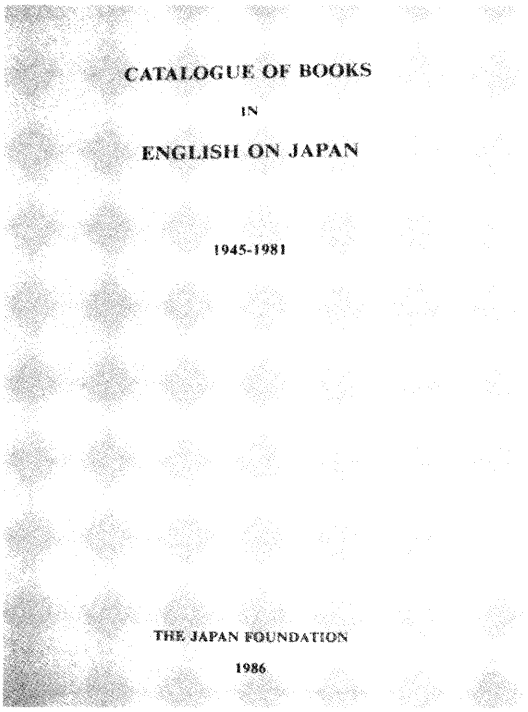


（3）イリノイ大学の中心であるアーバナ・シャンペーン校の総合図書館を訪問した。ここの所蔵冊数の多さでは全米でも有名である。

Japanese Collection & Resources担当のWitt氏は不在であったが，Slavic, East European & Eurasian Collection担当のJoe Lenkart氏（International Reference Librarian Manager, Slavic Reference Service（Assistant Professor））にお会いした。

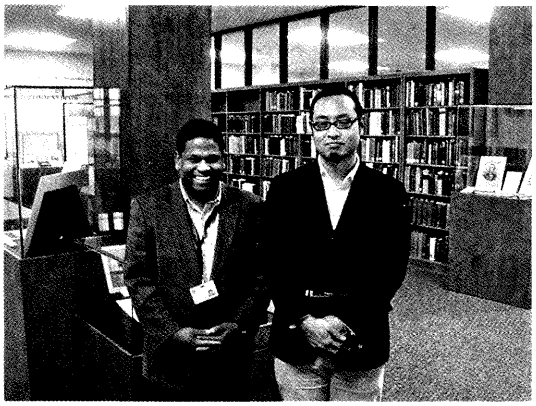
そこで，日本研究に関する書籍を用意してくださっており，様々な書籍を見せていただいた。





上掲の上は1997年に発行された「日本研究のための参考資料　改訂版」であり，下は1986年に発行された日本に関する英語文献カタログである。

Lenkart氏は山口大学との提携に非常に前向きとの印象が強かった。こちらの東亜経済研究所の重要目録を希望していた。



貴重本室の前で，Lenkart氏と。

最後に，1950年に渡米された日本博英イリノイ大学名誉教授にも再会した。

交渉における助言が得られるであろう。（了）